『源氏物語』の几帳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6014

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第四十七号、平成二十七（二〇一五）年三月

『源氏物語』の几帳

倉田　実

【キーワード】寝殿造、屏障具、調度、室礼

はじめに

開放的な寝殿造は、障子・御簾・壁代などの固定的な屏障具の他に、屏風・几帳などの移動可能な調度も使用して室内を適宜に区画し、開放性を和らげていた。また、男女が直接顔を合わせて対面することが避けられていたので、御簾や几帳などで間を隔てるようにしていた。しかし、これらの屏障具のなかで、几帳は遮蔽する度合が低かった。随意に移動が可能で、帷子を上げれば、視線や人の通行の障害にならなかった。したがって、几帳には遮蔽と通行の両様の意味合いが生じて、そのありようが人間関係と密接にかかわっていた。このことにおいて几帳は物語展開に機能している。

この小稿では、几帳について確認したうえで、それと関係する語彙を『源氏物語』から取り出しながら、小道具として働く具体的・生活的様相と、そこにまつわる人事の関係性を整理していくことにしたい。

本文は新編日本古典文学全集を使用するが、表記を私に換えた箇所がある。

一　几帳について

最初に、すでに常識に属することになろうが、几帳自体について確認しておく。

几帳の「帳」は垂らす布の意で、帷子のこと、「几」は帳を支える骨組のことになる。几は、土居と呼ぶ台に二本の丸柱の足（脚）を立て、その上部に横木（手ともいう）を渡した形である。横木の両端には飾りの金具がつき、幅は帳よりも少し長くして、突き出るようにする。几は黒塗で、高級なものは蒔絵や螺鈿が施される。

几帳は、その大きさから、土居上部からの足の高さによって「二尺几帳」「三尺几帳」「四尺几帳」（一尺は約三〇㌢）などの別があり、用途が違っていた。そして、この高さによって、帳の幅が決まっていた。布の幅を数える単位は「幅」で、一幅は30㌢ほどになり、その数が幅になっていた。二尺几帳は二幅、三尺几帳は三幅ではなく四幅、四尺几帳は同じく五幅となる。各幅は縫合するが、四尺几帳は中央部を縫わずに少しずつ開け、そこを「几帳の綻び」と呼んだ。

縫合した帳の上部は袋縫いにして棹を通し、幅毎に紐で横木に結ぶ。袋縫いの下には別に飾り紐を横様に刺し通して、帳の両端で結びにして垂らす。

各幅には野筋と呼ぶ紐を裏で折り返し、表に二筋にして垂らす。帳に野筋が二本垂れる側が表、几が見える側が裏で、こちらを使用する人に向けた。使用しない場合は、帳を横木に掛けておいた。

帳（以下、帷子とする）は季節によって材質と文様などを換え、春冬は練絹に朽木形（朽木に残る木目を図案化した文様）、夏秋は生絹に花鳥の文様を描く。帷子は、一重・二重の他に、何枚も重ねることがあり、『栄花物語』第十六「本の雫」巻の妍子枇杷殿遷御の段に「綾に薄物重ねたる末濃の御几帳ども」（二五六頁）とするものが見える。このように、儀式用には豪勢に仕立てて華やかな文様としたので「美麗几帳」と呼んだ。また、服喪の際や尼などは、鈍色や黒色などにし、産室では白色にした。

几帳は基本的に二本一双で使用されたが、一本だけのこともあった。二尺几帳は御帳台の中に置く「枕几帳」にし、「小几帳」と言うこともある。この几帳については、『類聚雑要抄』巻四に康平三年（一〇六〇）八月十一日の後冷泉院移御の際に使用された記事がある。三尺几帳は「短き几帳」ともされ、御座の側に置くほか、外出時に顔を隠す「差几帳」にした。『年中行事絵巻』巻一「朝覲行幸」の法住寺殿門前にこの様子が描かれている。四尺几帳は「常の几帳」「高き几帳」などとされ、御簾・障子・妻戸・格子などに添えるほか、御帳台の南・東・西の中央口に置く「寄几帳」にした。また、御簾や御帳台の帳を上げる目安とされ、横木の上に拳二つ分高く巻き上げる作法があった。

几帳を置く場合、御簾・障子・妻戸・格子・御帳台などに添える以外、畳の縁や板敷の並びなどと平行にすることはなかった。枕几帳は、二本の時には八の字形に置かれ、御座などでは一本だけを置き、45度傾ける筋交にした。

以上が几帳の概略になる。まだ触れなければならない点もあるが、それらは逐次補っていくことにして、次に、こうした几帳が物語展開にいかに必須なアイテムであったかを確認することにしたい。

二　空蟬巻の几帳と「几帳の後ろ」

几帳は、物語でも重要な働きをするアイテムとして、様々な場面に記されている。その典型的な場面の一つである「空蟬」巻を見ることで、その重要性を確認したい。紀伊守邸に逗留している空蟬に再度の逢瀬を願って、光源氏が小君の導きでその寝所に侵入する段である。

「紀伊守の妹（空蟬）もこなたにあるか。我にかいま見せさせよ」と、のたまへど、「いかでかさはべらん。格子には几帳添へてはべり」と聞こゆ。（略）

導くままに母屋の几帳の帷子引き上げて、いとやをら入りたまふとすれど、みなしづまれる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしも、いとしるかりけり。女は、さこそ忘れたまふをうれしきに思ひなせど、あやしく、夢のやうなることを、心に離るるをりなきころにて、心とけたるいだに寝られずなむ、昼はながめ、夜は寝覚めがちなれば、春ならぬ木のめもいとなく嘆かしきに、碁打ちつる君、今宵はこなたにと、今めかしくうち語らひて、寝にけり。若き人は何心なういとようまどろみたるべし。かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、一重うち懸けたる几帳の透間に、暗けれど、うちみじろき寄るけはひいとしるし。あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着て、すべり出でにけり。

（空蟬巻・一二三／一二四頁）

右には三種の几帳が示されている。一例目は格子に添えた、廂の四尺几帳になる。『源氏物語』の格子は一枚格子なので外御簾になり、格子の内側に几帳を添えるのである。小君は、光源氏から垣間見させ

よと言われて、格子に几帳が添えられていて、そう簡単でないことを言っている。そこで小君は、室内に光源氏を導くことになる。

二例目は、同じく四尺の母屋の几帳である。廂との境に御簾があるはずだが、夏なので巻き上げて、几帳だけ置いていたのであろう。光源氏はその帷子を引き上げて廂から母屋に入っている。

三例目は寝所に置いた三尺の几帳である。光源氏が母屋に入った際の衣ずれの音が、空蝉の耳に届いている。空蝉の心中描写については省略するが、さらに焚きしめた香の匂いも漂ってくる。そこで空蝉は顔をもたげてみると、この几帳は表一枚の帷子を横木にうち懸けていたので、裏の薄い帷子の透間から、男がにじり寄ってくる気配がはっきりと分かったという。あさましく思った空蝉は、急いでその場から去っている。なお、「几帳の透間（すきま）」は「隙間」とあったのを換えたが、「一重」とあるのを含めて後述する。

寝所に侵入する男の様子、その気配を察した女の判断などが、几帳を軸にして展開している。几帳は遮蔽する調度だが、ここではその機能を発揮せず、男に通行を許していた。また、男の侵入に気付く機微は、帷子のある几帳だからこそであり、屏風などではこのようには展開できない。几帳がきわめて重要な役割を担っているのである。そこで、改めて几帳のありようを確認したいのである。

なお、「帚木」巻で光源氏が紀伊守邸に方違えに訪れる前に、紀伊守から父伊予介の女房（空蝉のこと）が逗留していることを言われて、次のように返事していた。

その人近からむなんうれしかるべき。女遠き旅寝はもの恐ろしき心地すべきを。ただその几帳の後ろに。（帚木巻・九三頁）

光源氏は女房が近くにいるのは嬉しいとして、その「几帳の後ろ」にでも休ませて欲しいと応えている。ここで、なぜ光源氏は「几帳の後ろ」と言っているのか。それは、そこが女房たちの居場所になるからである。女房たちと一緒にいたいと匂わせたことになる。「几帳の後ろ」が女房たちの居場所になることは、次のような用例ではっきりする。

・御几帳の後ろ、障子のあなたなどの開き通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、（葵巻・六三頁）
・老御達など、ここかしこの御几帳の後ろに、かしらを集へたり。（少女巻・三六〜七頁）
・御几帳の後ろなどにて聞く女房、死ぬべくおぼゆ。（行幸巻・三二四頁）
・近くさぶらふ人も、すこし退きつつ、御几帳の後ろなどにそばみあへり。（藤袴巻・三三〇頁）

いずれも「几帳の後ろ」に控えるのは、女房たちである。逆に言えば、控える女房の側には几帳があることになる。引例は省略するが、『源氏物語絵巻』の「柏木㈠」「早蕨」「東屋㈠」の各段は、まさに「几帳の後ろ」の女房たちの光景となろう。

「几帳の後ろ」の他に几帳にかかわる語彙として、先の「空蝉」巻には「添ふ」「引き上ぐ」「うち懸く」などがあった。これら以外にも、几帳の状態や移動を示す言葉が幾つも認められ、そのことによって几帳にまつわって物語が展開している。続いて、几帳にかかわる語彙を『源氏物語』から取り出して整理していきたい。

三　几帳の移動を示す語彙

几帳を置くことは「立つ」か「添ふ」で示していた。両者の用例から見ていく。

「立つ」は几帳を置く意であり、これには贅言を要しまい。以下にもこの用例は出てくるので、二本立てる場合から始める。廂などを区切る際に、並行させた几帳同士の間隔を空けて、見えにくくすることがあり、それを「立て違ふ」と言った。一本の几帳の帷子を上げても、向かい合ってもう一本あれば、その奥にいる人が見られずに済むからである。このことは后立ちの日の作法として『雅亮装束抄』に記され

ている。しかし、それでも几帳のあわいから見通せることもあった。

人の衣の音すと思して、馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例、さやうの人のゐたるけはひには似ず、はればれしくしつらひたれば、なかなか、几帳どもの立て違へたるあはひより見通されて、あらはなり。（蜻蛉巻・二四八頁）

女一宮の光源氏・紫上に対する追善法華八講の日であり、薫が愛人の宰相の君を訪ねて六条院春の町の「西の渡殿」にやって来たところである。引用中の「馬道」の場所は西の対なのか西渡殿なのか諸説があってよく分からないが、そこの障子がわずかに開いていたので、薫は垣間見に及んでいる。几帳はわざと「立て違へ」にしてあったが、その間からあらわに見通せたというのである。配置の仕方が杜撰だったのであろう。そのために薫は、女一宮の姿を目にすることができている。晴の行事の日の女一宮の休み所なので、几帳を「立て違へ」にしたわけであったが、その効果がなかったのである。

「立つ」の他に「添ふ」が使用されるのは、先に記したように御簾や障子、あるいは妻戸や格子などに接するように置くからである。基本は見通しをさらに難しくさせるためだが、通行の障害になるほどではないのが几帳となる。また、御簾に几帳を添えるのは、室内での男女の対面などにおいて普通に見られる室礼の仕方であり、『源氏物語』でもこの用例は多い。この場合の御簾は「母屋の御簾」で、それに几帳を添えて女が母屋に坐り、男は廂に坐ることになる。

なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人づてならでありけり。（藤袴巻・三二九頁）

夕霧が光源氏の使いとして玉鬘を訪ねた段である。これまでは、異母姉弟と思っていたが、裳着によって玉鬘の素姓が明かされ、いまではそうでないことがはっきりしている。しかし、それまでの習慣から、夕霧は廂に通され、母屋の玉鬘と御簾・几帳越しに対面している。両者の親密の度合を示すのであり、この対面の仕方と対照化されるのが、同巻での柏木であった。「添ふ」はないが見ておきたい。

見聞き入るべくもあらざりしを、名残なく南の御簾の前に据ゑたてまつる。みづから聞こえたまはんことはしも、なほつつましければ、宰相の君して答へ聞こえたまふ。（略）「悩ましく思さるらむ御几帳のもとをば、ゆるさせたまふまじくや。よしよし。げに、聞こえさするも心地なかりけり」とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞こえたまふ。（同・三三九／三四〇頁）

これまでの柏木は、玉鬘への懸想文など問題にもされなかったが、今となってはその「名残」もなく、「南の御簾の前」に据えられている。この点に対して、新全集は「以前とはちがって、正面に迎え入れられる。正客としての待遇」（新大系なども似たような解）としているが、曖昧であり、「南の御簾」の場所を明確にせず、「正面」も紛らわしい。柏木が据えられたのは、集成が指摘するように南簀子であり、「御簾」は「廂の御簾」になる。玉鬘のそもそもの居場所は西の対であったが、ここでは「南の御簾」との指示の仕方から寝殿のようであり、柏木は二間の前あたりの南簀子に通されたことになる。正客としての扱いなら、廂に入れることになるが、そこまでしていないのである。玉鬘は夕霧の時と同じように母屋にいて、廂の宰相の君が、簀子の柏木との間を取り次ぐことになる。

この対応の仕方に柏木は不満を覚えるのであり、中略後の箇所では、母屋の几帳のもとにお許しを得たいとせがんでいる。本来なら、柏木の居場所は夕霧のように廂でもいいわけであったが、物語はわざと逆転させている。柏木とは親密ではないからである。今後の玉鬘との関係性からして、夕霧が大切なのであろう。「竹河」巻になって、この両者のことが語られることになる。

御簾に几帳を「添ふ」ことで顔を見せないようにするのは、女性のたしなみになるが、場合によっては顔が見えてしまうことがある。

御几帳添へたれど、そばよりほのかにはなほ見えたてまつりたまふ。（夕霧巻・四六八頁）

夕霧が六条院にいる養母花散里を訪ねた段である。花散里は御簾に

几帳を添えているが、夕霧には几帳の横から花散里の顔が見えたとされている。新全集は「夕霧の顔が見たくてこうする、義母らしいうちとけたしぐさ」としている。ここは義母ではなく養母だからであり、落葉宮との一件を知っていた花散里は、心配して夕霧の顔を見ようとしたのであろう。

また、「立て違へ」と同じく、一本でも几帳の添え方が悪いと、内部が見えてしまうこともある。

隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、（野分巻・二七九頁）

夕霧が玉鬘を垣間見するところである。ここは妻戸の御簾に几帳が添えられていたが、その立て方がきちんとしていなかったので、夕霧は御簾を引き上げるだけで内部を見ることができている。そこには親子と思っていた光源氏と玉鬘が寄り添っていたのであった。几帳がきちんと御簾に添うように立てられていなかったので、垣間見ができたのである。几帳が巧妙な役割を負っていよう。

御簾と几帳の取り合わせは、薫と中君の場合などにも見られるが、この点は後に触れるとして、障子に添える場合も確認しておきたい。いずれも「立つ」の用法になる。

・几帳を障子口には立てて、灯はほの暗きに見たまへば、（帚木巻・九八～九頁）

・尼君、障子口に几帳立てて対面したまふ。（手習巻・三〇五頁）

前者は、空蟬と契り交わすことになる段で、この障子は寝殿母屋を東西に分ける「中の戸」になる。その西面側の口に几帳が置かれていたのである。後者は妹尼が亡き娘の婿であった中将と対面する段で、どこの障子か不明だが、その口に几帳を立てている。障子を開いて対面するつもりなので几帳は「添ふ」ではなく「立つ」とされたのであろう。尼姿なので、中将に見られないようにする配慮となる。

以上が、几帳を「立つ」「添ふ」とする使用例の確認である。さらに移動を示す言葉を見ていきたい。

＊　＊　＊

几帳の移動を示す言葉は多様にある。続いて、立て方を整える場合である。侍女などがくつろいでいたところに主人、あるいは親や夫、また賓客などがやってくると、几帳の位置や帷子を直したりして、部屋を整えていた。その際は、「引き直す」「引きつくろふ」などとされた。

・渡らせたまふとて、人々うちそよめき、几帳引き直しなどす。（野分巻・二八四頁）

・「大将殿参りたまふ」と人聞こゆれば、例の、御几帳引きつくろひて、心づかひす。（東屋巻・五〇頁）

前者は、明石姫君が紫上のもとから自室に戻ってくるというので、侍女たちがあわてて几帳の「引き直し」をしているところである。後者は、薫大将が二条院を訪ねた折で、侍女たちが几帳の「引きつくろひ」などをしている。両例とも位置を直し、帷子や野筋を整えるのである。なお、次の「引きつくろひ」は、理由がこれとは違っていよう。

御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじく華やかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳引きつくろひ隔てたまふ。（初音巻・一五三～四頁）

光源氏が新年に二条東院に住む末摘花を訪ねた段である。末摘花の鼻の色に改めて幻滅した光源氏は、見なくてもいいように几帳を「引きつくろひ」している。几帳の位置を直して、末摘花を視線から遮断したのである。相手が末摘花だからこその几帳の使われ方となる。

次は、几帳が差し出される場合である。賓客があって侍女などが応対する場合には、几帳が差し出される。

・あさましう煤けたる几帳差し出でて、侍従出で来たり。（蓬生巻・三三八頁）

・弁の尼召し出でたれば、障子口に、青鈍の几帳差し出でて参れり。（宿木巻・四五四頁）

「差し出づ」の用例である。前者は、侍女の侍従を、末摘花の叔母

が下向先に連れて行こうとして迎えに来た段で、侍従は煤けた几帳を差し出して応対に出て来ている。後者は宇治八宮邸に出掛けて来た薫に応対するため、弁の尼が、その姿に相応しい「青鈍の几帳」を障子口に差し出して応じている。ここも先の妹尼のように、障子を開いて応対するつもりなのであろう。右の両例ともわざわざ几帳を差し出している例である。

＊　＊　＊

夫と妻の関係でも、その間に几帳を置くのがたしなみになり、妻は几帳を「引き寄す」ことをして隠れ、夫は邪魔なので「引きやる」か「押しやる」ことになる。

・院は、姫宮の御方におはしけるを、中の御障子よりふと渡りたまへれば、えしも引き隠さで、御几帳をすこし引き寄せて、みづからははた隠れたまへり。（略）「…まづは、かやうにはひ隠れて、つれなく言ひおとしたまふめりかし」とて、御几帳を引きやりたまへれば、母屋の柱に寄りかかりて、いときよげに、心恥づかしげなるさましてものしたまふ。（若菜上巻・一二四／一二五頁）

明石君が父入道から届けられた願文や手紙などを見ているところに光源氏がやってきた段である。思いがけないお越しなので、願文などは隠せなかったが、明石君自身は几帳を「引き寄せ」て、その陰に隠れている。几帳に隠れる様子は、この他にも多く認められるので、後にまとめて確認する。一方の光源氏は、明石君との言葉のやり取りから、このように隠れて、自分をこきおろしていると冗談を言いながら几帳を「引きやり」、姿を見ようとしている。妻が「引き寄す」ことと、夫が「引きやる」ことが、巧妙に語り分けられている。几帳が小道具以上の働きをして、夫と妻の良好な関係を象っていよう。隠れることと、見えるようにすることと両様の働きが語り分けられるのであり、もう一例ずつ示しておきたい。

・中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送りたまへとおぼしく、御几帳引きやりたれば、御髪もたげて見出だしたまへり。（夕顔巻・一四七頁）

・脂燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、「なほ持て参れ」と、のたまふ。（夕顔巻・一六六～七頁）

前者は、光源氏が六条わたりの女のもとから後朝の別れをするところで、寝所に寝たままの女が見送りできるように、侍女の中将のおもとが枕上の几帳を「引きやる」ことで見えるようにさせている。後者は、光源氏が息をしていない夕顔を見ようとして随身に脂燭を持って来させたところで、几帳を夕顔のもとに「引き寄す」ことで見られないようにしている。女が男を見えるように侍女が「引きやる」ことをし、男が女を他者の目から隠すために「引き寄す」ことをしたのである。

「引きやる」のほうは、適切な位置からずれて立てられている場合にも使用される。

・帳の東面に添ひ臥したまへるぞ宮ならむかし。御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬杖つきて、いともの悲しとおぼいたるさまなり。（澪標巻・三一二頁）

・御几帳どもしどけなく引きやりつつ、人げ近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまより走り出づるに、（若菜上巻・一四〇頁）

前者は病床の六条御息所を光源氏が見舞った際に、前斎宮（秋好中宮）を垣間見する段である。几帳が無造作に引き寄せられていたために見通せて、御帳台の隣で添い臥していたのが前斎宮だと気づいている。新全集はここを、「几帳の帷子が片方におしやられている、その隙間から」としているが、几帳そのものであろう。「片方におしやられている」とする状態の場合は、几帳ではなく、帷子と明示されよう。後者は、柏木が女三宮を見てしまう段である。ここも廂の几帳が無造作に一方に引き寄せたりしてあって、これはたしなみのない侍女がし

たことになる。そのために、猫の綱が御簾を引き上げてしまい、「几帳の際すこし入りたるほどに、袿姿にて立ちたまへる人あり」（同）と見られてしまったのであった。両例とも「しどけなし」が使用されており、その状態は垣間見などを誘発するのである。

「押しやる」は「引きやる」と対になる用例である。夫妻や親子などの関係では、「引きやる」と「押しやる」とは意味的にあまり差異がないようである。

・廂なる御座についゐたまひて、「灯こそいと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものとこそ聞け、さも思さぬか」とて、几帳すこし押しやりたまふ。（玉鬘巻・一二九頁）

・女君、短き几帳を隔ててはするを、押しやりて、ものなど聞こえたまふ。（東屋巻・四三頁）

前者は夫妻ではなく、光源氏と玉鬘の場合で、「親」を装う光源氏は、親の顔をみたいとは思いませんかと言って、几帳を「押しやる」ことでどかしている。玉鬘に自身を認知させたいからであるが、何よりも容貌を見たいのである。後者は、浮舟の母が、二条院の匂宮と中君の様子を垣間見する段で、匂宮は「短き几帳」であっても「押しやり」、じかに中君と話そうとしている。ここの「押しやる」も先の光源氏が明石君が隠れた几帳を「引きやる」のと同じく情愛表現なのである。

「押しやる」に近い言い方として、「押し入る」がある。

こよなく奥まりたまへるもいとつらくて、簾の下より几帳をすこし押し入れて、例の、馴れ馴れしげに近づき寄りたまふがいと苦しければ、わりなしと思して、少将といひし人を近く呼び寄せて、（宿木巻・四四五頁）

薫が二条院の中君のもとに訪れた段であり、「宿木」巻では三回目の訪問になっている。大君亡きあと中君への思いがいや増している薫は、奥まって控えるその様子がつらく感じてしまう。そこで御簾をかいくぐって、几帳を奥に押しやっている。そうすることで母屋に侵入する余地を作ったのである。それに気付いた中君は侍女を呼んで、やめさせようとしてするので、薫は居直っている。この場面は「押しやる」でもいいかもしれないが、「押し入る」とすることで、よりはっきりと侵入する余地を作っていると判断できよう。この後さらに「几帳の下より手をとらふれば」（同・四四九頁）ということになっている。

この他に御簾などに几帳を強く添わせる「押し出づ」（椎本巻）や「押し寄す」（同）などがあるが、これらは論末で触れたい。なお、几帳を寄せておくことを「引きなす」という場合が一例（蜻蛉巻・二五〇頁）だけあることを指摘しておきたい。

以上、指摘だけのものを含め、几帳の移動にかかわる語彙として「立つ」「立て違ふ」「添ふ」「引き直す」「引きつくろふ」「差し出づ」「引き寄す」「引きやる」「押しやる」「押し出づ」「押し寄す」「押し入る」「引きなす」などが使い分けられていたことを確認したことになる。こうした語彙が接続することで、几帳は多面的に物語展開に寄与しているのである。これは几帳が、屏風などより、はるかに移動が容易であったことによっている。さらに几帳の帷子にかかわる語彙もあるので続けて見ていきたい。

四　帷子にかかわる語彙

まず帷子自体について補足しておく。色合や文様については、『源氏物語』で触れるところは少ない。鈍色・黒色は認められるが、これ以外では、次の二例のみである。色合・文様などは季節によって定型化していたので、わざわざ触れるまでもないのであろう。二例とも「美麗几帳」になる。

・廊の戸口に御簾青やかに懸けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、（蛍巻・二〇六頁）

・東面は屏風を立てて、母屋の際に香染の御几帳など、ことごとし

きやうに見えぬもの、沈の二階なんどやうのを立てて、

（夕霧巻・四八一頁）

いずれも晴の装いとなる。前者は六条院馬場殿での競射を見るための室礼の様子で、今風の裾濃の几帳が飾り立てられている。妻戸の御簾に添えたのであろう。後者は落葉宮と強引に契りを交わした後のことで、一条邸を新たに室礼した様子である。これまでは一条御息所の喪に服していたが、二人の関係を思った大和守（落葉宮のイトコ）が、ことごとしく見えないように香染の几帳などを母屋に立てていた。華やかにはしていないが、鈍色などにせずに、晴を意識していることになろう。この二例が色合についての用例となる。

帷子の各幅には、野筋と呼ばれる紐を裏側で折り返し、表に二筋にして垂らしていた。飾りにもなるが、実際的には巻き上げる際の懸紐にした。色は黒が基本だが、美麗几帳の場合は裾濃や村濃に仕立てた。『源氏物語』で野筋は「紐」として一例あるのみである。

近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちとけながら掻きまさぐりけるほど見えてをかしければ、

（明石巻・二五七頁）

光源氏が明石君と初めて契りを交わす段である。几帳の野筋が揺らいで箏の琴の絃に触れて音を立てているのが光源氏の耳に聞こえ、これまで明石君がくつろいで弾いていた様に思いやっている。明石君がみじろいだ際に、揺れた野筋が琴に触れたのであろう。絵巻物などでは、二本の野筋が絡まっている状態で描かれることが多いが、その理由の一つに揺れて乱れやすいという実際的な事情があったと思われる。

＊　＊　＊

それでは、帷子に関係する語彙に入りたい。帷子も几帳の場合と同じく移動や状態に関連する語彙が多い。帷子を横木に掛ける「うち懸く」と「引き下ろす」が対としてあり、ただ持ち上げるのは「引き上ぐ」になる。帷子の裾などには、几帳の場合と同じく「引きやる」や「かきやる」がある。また、帷子の「綻び」や「隙」も恋物語の展開として重要な語彙になっているので、これは節を換えて検討する。

ここでは「うち懸く」から具体的に見て行きたい。帷子は、几帳自体を使用しない場合、横木に「うち懸く」ことになるが、それ以外の理由でされることがある。すなわち、暑苦しかったり、くつろぎたい折などである。

・紛るべき几帳なども、暑ければにや、うち懸けて、いとよく見入れらる。

（空蝉巻・一一九頁）

・誰かは来て見むともうちとけて、穴も塞がず、几帳の帷子うち懸けて押しやりたり。

（浮舟巻・一一九頁）

両例とも帷子が横木に懸けられている例になる。前者は、空蝉と軒端荻とが囲碁に興じている様子を光源氏が垣間見するところで、二人は暑苦しいので帷子を上げて風通しをよくしている。そのために垣間見が可能なのであった。後者は宇治に赴いた匂宮が浮舟たちの様子を垣間見する段で、侍女たちは誰も来ないだろうということで几帳の帷子をうち懸けて、隅に押しやっている様子である。後者の場合も、帷子がうち懸けられていたために垣間見が可能となっている。

なお、几帳があると暑苦しいとする例があるので挙げておきたい。

大臣も渡りたまひて、かくうちとけたまへれば、御几帳隔てておはしまして、御物語聞こえたまふを、「暑きに」と、にがみたまへば、人々笑ふ。

（帚木巻・九一～二頁）

左大臣邸での光源氏の様子である。くつろいだ姿でいた光源氏のもとにやって来た左大臣は、間に几帳を置いて対面しようとしている。その配慮に対して、暑いのに几帳を立てるなんてと苦い顔をしたとされる。夏の几帳は暑苦しいので、どかさない場合は帷子を「うち懸く」のである。

横木にうち懸けられた帷子に対して、「一重」とされる場合がある。第二節で引用した「空蝉」巻にすでにあったが、さらに次のような例がある。併せて引用する。

㋐　顔をもたげたるに、一重うち懸けたる几帳の透間（すきま）に、暗けれど、

うちみじろき寄るけはひいとしるし。　（空蟬巻・一二四頁）

㋑　御几帳の帷子を一重うち懸けたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるか、とあきれたり。　（蛍巻・二〇〇頁）

㋒　障子のあなたに、一尺ばかりひき離けて屏風立てたり。そのつまに、几帳、簾に添へて立てたり。帷子一重をうち懸けて、紫苑色のはなやかなるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。屏風の一枚畳まれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。　（東屋巻・六〇頁）

三例とも「一重（を）うち懸く」の用例であり、同じ状態を指示していよう。㋐が先の「空蟬」巻、㋑は光源氏が蛍宮に玉鬘を見せようとして、そこの帷子をうち懸けるのと同時に包まれた蛍をさし出したところ、㋒は匂宮が二条院に滞在していた浮舟を見つけて、誰と知らずに言い寄ろうとした際になる。これらの「一重（を）うち懸く」には両説あって、新全集は帷子の一幅をうち懸けたとし、集成は㋐の箇所に「几帳の帷子（表と裏二枚）のうち裏一枚を几帳の手（横木）に掛けてあるのであろう」としている。また、新大系は、校注者の違いによるが、㋑の箇所に対して、「一重」は、五つ幅からなる帷子の一つ幅のことか。あるいは、表・裏二枚から成る帷子の裏のことか」と両説を併記し、それ以外は一幅説になっている。この二説を、どう解すべきか。

ここは、裏ではなく表一枚をうち懸けたとするのが妥当であろう。裏一枚を手に懸けるのは、足が邪魔して無理である。また帷子の各幅は互いに縫合するので一幅だけ懸けるとするのも無理である。第一節で触れたように、帷子は一重（一枚）だけではなかった。したがって、ここは表の一枚をひき懸けたとすべきである。表は見通せないような生地になるが、裏は薄くて透けて見えるのであろう。㋑のあとには、次のような用例もある。

えならぬ羅の帷子の隙（ひま）より見入れたまへるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、をかしと見たまふ。　（蛍巻・二〇一頁）

蛍宮の反応であり、その前には「えならぬ羅の帷子」の几帳が立てられていた。「羅」は薄い絹布であり、透けて見え、さらに「隙」（綻び）があったので、蛍の光が見えたのである。これと似たような事情が、先の三例であろう。㋐の空蟬は薄い帷子の「透間」に光源氏を見出したのである。わざわざ「一重」とあるので、几帳同士の「隙間」ではなく「透間」であろう。㋑の光源氏は視線の邪魔になる表の帷子をうち懸けて蛍火を裏一枚から透かせて見せたのである。㋒の匂宮はこの状態の几帳の向こうに浮舟の袖口を見出したことになる。几帳は帷子の表を横木に「うち懸く」ことをされていたので、裏一枚があっても視線の障害とはならなかったのである。蛍宮の側の「えならぬ羅の帷子」も含めて、いずれも透けてみえる情景を語っているのであり、これは王朝の美意識の一つになろう。

「うち懸く」に戻りたい。これをするのは、帷子に限らず、他の物もされていた。

・しさしたるものどもとり具して、几帳にうち懸けなどしつつ、うたた寝のさまに寄り臥しぬ。　（浮舟巻・一二三頁）

・わが御方におはしましなどして、昼つ方渡りたまへれば、のたまひつる御衣御几帳にうち懸けたり。　（蜻蛉巻・二五二頁）

・行ひなどをしたまふも、なほ数珠は近き几帳にうち懸けて、経に心を入れて読みたまへるさま、絵にも描かまほし。　（手習巻・三五一頁）

前二者は衣類になる。一例目は匂宮が宇治で浮舟たちを垣間見する段で、侍女たちはまだ仕上がっていない縫物を横木に懸けて休んでいる。くつろいだ仕草であり、また、たしなみのなさを語っていよう。二例目は、薫が垣間見た女一宮の着ていた「生絹の単衣」を、妻の女二宮にも着せようとする段である。女二宮は、着ることなく、几帳にうち懸けたままにしていたという。衣類は衣桁に懸けるのだが、わざと手近な几帳に懸けることで、気が進まないことを示したのであろう。

しかし、薫はおかまいなく、自身で女二宮に着せることになる。両例とも几帳に衣類を懸けるのは、好ましいことではないことを語っていよう。三例目は、勤行に励む浮舟の様子で、お経を読む際に、数珠を几帳に懸けていたとされる。新全集は「数珠を常時手にするのは、事々しく感じられるのであろう。浮舟ははにかんでいるらしい」とするが、熱心にお経を読んでいるとされるので、ややおかしなことになろう。集成の「常に手にしているはずの数珠を手離しているのは、まだ初心のさまをいうのであろう」とするのが妥当である。

「うち懸く」の反対が「引き下ろす」であった。几帳を几帳として使用するからである。

御几帳の帷子引き下ろし、御座などただひきつくろふばかりにてあれば、東の対に、御宿直物召しに遣わして、大殿籠りぬ。

（若紫巻・二五六頁）

紫君を二条院に略取して来た折で、使用していなかった西の対は几帳の帷子を引き下ろし、御座は整えればいいようになっていたという。使用しない几帳は帷子を「うち懸く」のが通例であったことを示している。

次は「引き上ぐ」である。帷子を手で引き上げるだけで、「うち懸く」わけではない。帷子ではなく、几帳を「引き上ぐ」とする用例もある。

小さき御几帳引き上げて見たてまつりたまへば、うち側みて恥ぢらひたまへる御さま飽かぬところなし。

（葵巻・六八頁）

光源氏が葵上邸から久しぶりに二条院に帰って紫君を見る場面である。「小さき御几帳引き上げて」とされるが、正確に言えば「小さき御几帳の帷子を引き上げて」であり、略した言い方になる。なお「小さき御几帳」は、三尺几帳とされるが、それよりも小ぶりなのかもしれない。ただし、中君が使用している例（宿木巻・四六五頁）があるので、子ども用というわけではなさそうである。これとは別に「短き几帳」とされるのが、三尺几帳であった。

帷子を引き上げるのは、几帳をうまく動かせない、あるいは動かしてはいけない表側の人がすることになる。裏側にいる人を見るためである。

・御几帳の帷子引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。

（葵巻・三八頁）

・御几帳の帷子をもののたまふ紛れに引き上げて見たまへば、

（御法巻・五〇八～九頁）

・袿姿にて、いと馴れ顔に几帳の帷子を引き上げて入りぬるを、

（総角巻・二五二頁）

一例目は、光源氏が物の怪に襲われた産褥の葵上を見舞う段で、几帳は動かさずに帷子を引き上げて寝所に入り、葵上の様子を見ている。二例目は、紫上の死顔を夕霧が見る段である。いずれの几帳も動かすわけにはいかないであろう。三例目は、薫が再び大君の寝所に侵入するところで、「いと馴れ顔」に振舞って、几帳を動かすまでもなく、帷子を上げて入っている。「引き上ぐ」は、隠れている人を見る動作なのである。

「引き上ぐ」のは帷子ではなく、「几帳のつま（端・褄）」とされる場合もある。

・几帳のつまを引き上げたまへれば、

（柏木巻・三一三頁）

・小さき御几帳のつまより、脇息に寄りかかりてほのかにさし出でたまへる、いと見まほしくらうたげなり。

（宿木巻・四六五頁）

前者は、柏木を見舞った夕霧が、その枕元の几帳の下端を持ち上げたところ、後者は「小さき几帳」の例で、「引き上ぐ」の使用はなく、「つま」だけの例だが、匂宮の琵琶を奏でる音色を聞くために中君が几帳の横端から身を乗り出しているところになる。控え目な動作を語る時、「つま」を注視させるのであろう。

以上の他には、「かきやる」と「引きやる」がある。

・かのすすけたる御几帳引き寄せておはす。（略）帷子をすこしか

きやりたまへれば、例のいとつつましげに、とみにも答へきこえたまはず。

（蓬生巻・三四九／三五〇頁）

・しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり。たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。帷子引きやりて、こまやかに語らひたまふとて、とばかりかへり見たまへるに、さこそしづめつれ、見送りきこゆ。

（松風巻・四一六頁）

前者は帰京した光源氏が末摘花邸に訪れたところで、末摘花は几帳を「引き寄せ」て隠れていたが、その帷子を光源氏が「かきやり」なさったとするもの。後者は明石君が移り住んだ大堰邸を訪ねた光源氏が帰るところである。几帳に明石君が隠れているので、その帷子を「引きやり」、親しく語りかけたという。両例とも女が几帳に隠れ、男がその帷子を退けたことになり、この事情は、先に見た「若菜上」巻の明石君が几帳を「引き寄す」ことをして隠れ、光源氏は邪魔なので「引きやる」ことをしたのと同じになる。明石君は、光源氏に対して、「松風」巻と「若菜上」巻で几帳に隠れることが語られており、一貫した人物造型とかかわっていよう。なお、ここに「かきやる」と「引きやる」が使用されているが、両例に差異があるのかどうか分かりにくい。ここの二例は同義で、「引き上ぐ」までにはいかない、退けるくらいの意味になるとしておきたい。

以上、帷子にかかわる語彙を見て来たが、「綻び」ということがあるので、さらに節を換えて見ていきたい。

五　几帳の綻び・几帳の隙

四尺几帳の帷子は各幅を縫合したが、中央部は開けておき、そこを「几帳の綻び」と呼んでいた。これとは別に「几帳の隙（ひま）」とされることもあるので、この用例から見ていきたい。

宮、几帳の隙より、ほの見たまふにつけても、思ほすこととしげかりけり。

（紅葉賀巻・三二四頁）

光源氏が算賀のため藤壺のもとに訪れた段である。その姿を藤壺は、「几帳の隙」から見出している。諸注多くは、文字とおり几帳の隙間としているが、どのような状態にあるのかを説明していない。ただし、新全集は『年中行事絵巻』巻二「闘鶏の家」の西廂の御簾に添えた几帳の綻びから侍女たちがのぞき見している図版を載せて、「几帳の隙間から覗く」とのキャプションを付けている。とすると、「綻び」と「隙」は同じと解していることになろう。几帳に隙間があるとしたら「綻び」しか考えられないので、そこを「隙」とするのだと思われる。

藤壺は「几帳の綻び」から光源氏の姿を見出したことになる。そして、「綻び」はまさに覗き見のために利用されていた。次の用例はすべて、この場合である。

㋐　外は暗うなり、内は大殿油のほのかに物より透りて見ゆるを、もしもやと思して、やをら御几帳の綻びより見たまへば、心もとなきほどの灯影に、御髪いとをかしげにはなやかに削ぎて、寄りゐたまへる、

（澪標巻・三一二頁）

㋑　ほのかなる大殿油に、御几帳の綻びより、はつかに見たてまつる、いとど恐ろしくさへぞおぼゆるや。

（玉鬘巻・一二九頁）

㋒　あながちに、妻戸の御簾をひき着て、几帳の綻びより見れば、物のそばより、ただ這ひ渡りたまふほどぞ、ふとうち見えたる。

（野分巻・二八四頁）

㋓　結びあげたるたたりの、簾のつまより几帳の綻びに透きて見えければ、その事と心得て、

（総角巻・二二三頁）

㋐は光源氏が病床にある六条御息所を見舞った段で、光の加減が変わったので、綻びから覗いてみると尼削ぎ姿が見えたというもの。㋑は光源氏が玉鬘のもとに初めて訪れたところで、玉鬘がその姿を綻びから見出している。㋒は夕霧が明石姫君を覗き見るところで、御簾を引き被って、添えられていた几帳の綻びから見ている。㋓は八宮一周忌が近づいて薫が宇治に訪れたところで、綻びから、「たたり」（糸繰

り台）を見出して、その準備をしていることを了解している。

いずれも綻びは覗き見る折に語られていて、几帳は屏障具でありつつ、視線を完全に遮断するものでないことが知られよう。

こうした用例とは別に、女性が出家する際に、綻びから髪を出して、僧侶に削いでもらうことも語られている。浮舟の場合である。

几帳の帷子の綻びより、御髪をかき出だしたまへるが、いとあたらしくをかしげなるになむ、しばし鋏をもてやすらひける。

（手習巻・三三八頁）

これが貴族女性が尼削ぎする際の当時の作法であった。切られた髪は、櫛の箱に納められる。物語では、浮舟の素晴らしい髪を見た剃髪役の阿闍梨が、しばし鋏の手を休めたとされている。

以上が「几帳の綻び」の使用例になる。

六　「隠る」と「隔つ」

几帳とその帷子の状態や移動にかかわる語彙を見て来たが、次は几帳に隠れる、几帳で隔てるといった用例を見ていきたい。この用例の一部はすでに引用しているので、それ以外を見ていくことになる。まず「隠る」「隠す」などである。

㋐　青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたく居隠して、袖口ばかりぞ色ことなるしもなつかしければ、（初音巻・一五六頁）

㋑　かく渡りたまへれば、すこし起き上りたまひて、御几帳に、はた、隠れておはす。（真木柱巻・三五三～四頁）

㋒　隠ろへたる几帳をすこし引きやりて、こまやかにぞ語らひたまふ。（早蕨巻・三五九頁）

㋓　簾のつま引き上げて物語したまふ。几帳に隠ろへてゐたり。（東屋巻・八五頁）

㋔　かたへは几帳のあるにすべり隠れ、あるはうち背き、（蜻蛉巻・二六七頁）

場面の説明は、割愛するが、㋐は光源氏に対する空蝉の尼君、㋑は同じく玉鬘、㋒と㋓は薫に対する弁の尼、㋔は同じく六条院の侍女たちのそれぞれの様子である。すでに明石君の場合を見ているので、侍女たちを除けば、四人の女性が几帳に隠れる様子を見せている。空蝉の尼君と弁の尼は、その出家姿を見せないようにする作法となる。この二人を含めて、几帳の隠れるのは、女性としてのたしなみの表現となっている。

「隔つ」については、次のような用例がある。

㋕　御簾の中に入りたまひぬ。御几帳ばかりを隔てて、みづから聞こえたまふ。（薄雲巻・四五九頁）

㋖　「こなたに」とて、御几帳隔てて入れたてまつりたまへり。（少女巻・三七頁）

㋗　御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。（初音巻・一四七頁）

㋘　上も一所におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞こえたまふ。（初音巻・一五八頁）

㋙　妻戸の間に御褥まゐらせて、御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり。（蛍巻・一九八頁）

㋚　床をば譲りきこえたまひて、御几帳ひき隔てて大殿籠る。（蛍巻・二〇九頁）

㋛　御かたはらに御几帳ばかりを隔てて見たてまつりたまふ。（若菜下巻・二八二頁）

㋜　御几帳ばかり隔てて、またいとこよなうけ遠くうとうとしうはあらぬほどに、もてなしきこえてぞおはしける。（横笛巻・三四八頁）

㋝　大臣は御几帳隔てて、昔に変らず御物語聞こえたまふ。（竹河巻・六五頁）

㋞　御絵など御覧ずるほどなり。御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ。（総角巻・三〇三頁）

㋕は光源氏に対する梅壺女御、㋖は内大臣が雲居雁との間を隔てるように夕霧と対面するところ、㋗と㋘は光源氏に対する花散里、㋙は玉鬘に対面する明石姫君と紫上、㋚は玉鬘に対する蛍宮、㋛は柏木に対する落葉宮、㋜は女三宮に対する光源氏、㋝は夕霧に対する玉鬘、㋞は匂宮に対する女一宮になる。これら以外に、末摘花に対する光源氏、匂宮に対する中君の例をすでに引用している。

なお、以上とは違った几帳の隔ての用例がある。

御かたはらなる短き几帳を、仏の御方にさし隔てて、かりそめに添ひ臥したまへり。（総角巻・二三六頁）

薫が大君と夜を過ごす段であり、八宮が仏間にしていた母屋西面だったので、仏に遠慮して几帳で隔てたのであった。特殊な用例となろう。

「隔つ」も「隠る」も同じ意味合いになるが、用例を見渡してみると、このことが決して人間関係を損ねるものではないことが知られよう。逆に、「隔つ」や「隠る」があることで、たしなみのある人間関係、男女関係が維持されていたと言えよう。姿を隠したとしても、こうした語彙で示される人間関係においては、心は几帳を介して通じ合っていることになる。特に、㋗㋘に見られる光源氏と花散里の関係は、同床しなくても維持される、夫と控えめな妻の良好な関係性を語っている。また、「隔つ」「隠る」という事態は、夫と妻の間において容易に解消されることは見て来た通りである。几帳の介在は、たしなみのある人間関係を表現していることになる。

七　「椎本」巻の几帳

あらあら几帳のある情景を見てきたことになるが、最後に薫が大君・中君姉妹を垣間見する段を見て、この稿を終わりにしていきたい。

宮のおはせし西の廂に宿直人召し出でておはす。そなたの母屋の仏の御前に君たちものしたまひけるを、け近からじとて、わが御方に渡りたまふ御けはひ、忍びたれど、おのづからうちみじろきたまふほど近う聞こえければ、なほあらじに、こなたに通ふ障子の端の方に、掛け金したる所に、穴のすこしあきたるを見おきたまへりければ、外に立てたる屏風をひきやりて見たまふ。ここもとに几帳を添へ立てたる、あな口惜し、と思ひてひき帰る折しも、風の簾をいたう吹き上ぐべかめれば、「あらはにもこそあれ。その御几帳押し出ててこそ」と言ふ人あなり。をこがましきもののうれしうて、見たまへば、高きも短きも、几帳を二間の簾に押し寄せて、この障子に対ひて開きたる障子より、あなたに通らんとなりけり。まづ一人たち出でて、几帳よりさしのぞきて、この御供の人々のとかう行きちがひ、涼みあへるを見たまふなりけり。（椎本巻・二一六～七頁）

ここには、几帳・障子・屏風・御簾という屏障具が微妙に働いて、薫の垣間見を成功させている。概略をたどっておけば、次のようになる。

薫は八宮邸の西廂に落ち着いて、そこに宿直人を召し出している。その隣の仏間にしてある母屋西面にいた姉妹は、近くにいまいとして、母屋東面に移ろうとしている。その気配を察した薫は、西廂と母屋西面を隔てる「こなたに通ふ障子」の端に穴が空いているのを見つけていたので、そこから覗こうとする。そのために、西廂側に立てられていた「外に立てたる屏風」を邪魔にならないように引き退けている。障子の穴から覗いてみると、向こう側には几帳が「添へ立て」られていた。この几帳が邪魔をして母屋西面は見えずに残念に思っている折しも、南廂の御簾を風が吹き上げたので、侍女が「丸見えになるので、その几帳を押し出して御簾に添えて」と言う声がした。そこで、さらに穴から覗いてみると、高い几帳も短い几帳も南廂の二間の御簾に「押し寄せ」てあり、「この障子に対ひて開きたる障子」を通って、姉妹が母屋東面の自室に戻ろうとしているのが見えた。向こう側にあるこの障子が母屋を東西に分ける「中の戸」になっている。まず一人（中君）が立って、二間の御簾に寄せた几帳から外を覗いて薫の供人

の様子を窺うようにしていたという。ここから几帳を御簾に「押し出づ」「押し寄す」という移動にかかわる語彙も確認できる。

障子の穴から垣間見が出来たのは、まさに几帳が移動されたからであった。穴の目隠しにもなっていた場所から、廂の御簾際に移動されて、視線の邪魔にならなくなったのである。移動が容易な屏障具は几帳であった。物語は、移動される几帳を使用して、物語を展開させていると言えよう。

おわりに

以上、言及できなかった用例もあるが、几帳をめぐる『源氏物語』に見られる生活誌的様相は、関連する語彙を通してある程度示せたと思われる。その特徴は、何よりも移動可能であり、また、帷子のありようで、視線や人の通行の障害とはなっていないことであった。その為に、「空蝉」巻で光源氏の空蝉の寝所侵入が可能となり、「椎本」巻では薫の垣間見が出来ていた。また、隔てる調度でありながら、几帳を介する男女の関係性は、かえって良好であったことも確認できた。物越しの対面は、そらぞらしい感じで受け取る向きもあるようだが、几帳に視点をおいて実際に検討してみると、決してそのようにはなっていなかった。このような次第で、几帳に対する見方が、少しでも新たになったとすれば幸いである。

なお、『源氏物語絵巻』「柏木㈠」などでは几帳が何本も描かれている。これらについては、出版社三省堂のＨＰ上で連載している「絵巻で見る平安時代の暮らし」を参照されたい。「三省堂　絵巻」で検索が可能。また、御簾については、拙稿「『源氏物語』の御簾」（『文芸研究（明治大学）』126、二〇一五・三）で論じている。